

# 愛国的企業家の 栄誉をにない

---

朝鮮民主主義人民共和国  
外国文出版社  
チュチェ111 (2022)

# 愛国的企業家の 栄誉をにない

朝鮮民主主義人民共和国  
外国文出版社  
チュチェ111(2022)



宋大官

(1912. 8. 29. ~1994. 1. 11.)

## はじめに

「筆は軽々しく執るものではない」という言葉がある。

けれどもわたしがこうしてペンを執ったのは、何か特別な人生体験があるとか、文才があつてのことではない。

しばらく前ある記者が訪ねてきて、わたしの父の伝記を書きたいと思っているが、その資料を提供していただけないかと言った。

わたしはその時、わたしの話を種にして他人が書いてくれた流麗な文より、表現は上手に出来なくても自分の思いをありのままに書いてみたいという衝動に駆られた。さらにわたしは、この世には母について書かれた本は多いが、父のことを叙述した本はほとんどないということにも思いを至した。

そこでわたしは、文章はまずくても、自分の父に対する素直な気持ちをなんら飾り立てることなく書いてみようと思った。だが、わたしはここで父の自慢話をしようという気持ちは毛頭ない。

実際父の一生は、金儲けに余念のない企業家として終始した。

「今日やらなかったら明日はもはや手遅れだ」という

のは、わたしの幼い頃から常に父が口にしていた言葉である。幼いわたしの目に映っていたのは、時間に追われて後ろを振り返るとまもなく駆け回る父の姿であった。

このようにただ金儲けに奔走した普通のありふれた人間、ただの企業家に過ぎなかった父が、どうして愛国烈士の栄誉に浴することになったのか。

わたしはこの手記を通して、平々凡々たる企業家であったわたしの父が、その人生をいかにして転換させたかを素直に語りたいと思っている。

宋聖姫

## 目 次

1. わたしの父 .....	4
お坊さんの息子 .....	5
光を追って .....	17
2. 後ろを振り返るな .....	33
運命の転換点で .....	34
人生の老年期にも .....	43
3. 祝福を受けた生、企業家の価値観 .....	59
むすび .....	70

## 1. わたしの父

幼い頃からわたしは父の愛を独り占めにして育った。7人兄弟の末っ子であったせい、それとも自分が父に似たところが最も多かったせい、父は末娘のわたしを特別に愛し、外出する際はいつもわたしを連れて歩いたものである。

わたしが物心のつき始めた頃から父は、「どんなことをしてもきっと1等をするんだぞ」、「時間は一度去ったら二度と戻ってこない」などと強調し、自身の歩んだ過去の生活と結びつけて教訓とすべき話を折に触れて聞かせてくれた。

こうしてわたしは、兄たちもよく知らない父の過去の生活とその中に隠れた「生活の秘密」を一つ一つ知ることになった。ここで言う「生活の秘密」とは、何らかの驚くべき出来事や殺人、強盗のような恐ろしい過去を父が隠していたということではない。

父は決して何か生活上の秘密を隠して生きた人間ではない。財布すら持って歩くことを嫌う性分だった父に何の秘密が別にあったろう。

父には後ろを振り向くゆとりはなかった。現在手がけて

いる仕事のことを考えたり、その次になすべきことを考えるだけでも時間が足りなかった。

中にはわたしの父宋大官<sup>ソン デグァン</sup>が金には困らぬ財力のある企業家、あるいは大金持ちの息子なのだろうと考えている人たちもいたろうが、実は墨染めの僧衣をまとい、手に念珠を持って「南無阿弥陀仏」と唱えながら木魚を叩いたお坊さんの息子であった。ここにも奇異な運命のえにしがあるので、父についての話をここから始めようと思う。

### お坊さんの息子

19世紀の中頃、朝鮮の忠清道懷徳郡<sup>チュンチョン ヘドク</sup>のある貧しい農家で男の子が生まれた。

極貧の暮らしであってもわが子が育つのは家の喜びであり、その子はいつしか10数歳の少年に育った。けれどもその喜びは長続きしなかった。少年の両親が2人のわが子を残して次々に病死したのであった。

少年は姉と共に放浪生活を余儀なくされたが、その最中に姉まで亡くした。少年はあてもなくさまよい歩いた末、平安北道香山郡<sup>ピョアン ヒャンサン</sup>に至った。

ろくに食べることも出来なかった病弱な少年は、ついに路上に倒れてしまった。たまたまその時、布施を乞うて歩いていた僧が瀕死の少年を見て哀れに思い、寺に連れて帰った。

その少年はほかならぬ私の祖父宋景煥ソンギョフアンであった。このよ  
うないきさつで祖父は僧になったのである。

歲月は流れ、祖父の年も60歳を過ぎた。

ある年の春、肅川郡長興里スクチョン チャンフンを通りかかった祖父は、喉の  
渴きをいやそうとして、泉で米を研いでいる女に一杯の水  
を所望した。パガジ(中をくりぬいた半割のふくべ。ひしゃ  
くとして使う)に水を一杯汲み、垂れるしずくを白い手でぬ  
ぐい、そっと差し出すその女の様子にひきつけられて、祖  
父はわれを忘れたという。その時祖父の年は63歳だった。

その女を忘れることが出来ず、恋情を燃やしていた祖父  
は、還俗を決心して世間一般の人間に戻り、彼女と連れ合  
いになった。

その後祖父は、蓄えた金で土地を買い果樹園を造成し  
て、まず娘2人を、ついで68歳の年に男児(わたしの父宋大  
官 1912年8月29日生まれ)を儲けた。

人生の晩年に玉のような男の子を得た祖父の喜びはいか  
ばかりであったろうか、隣近所を巡り、蜂蜜はないかと尋  
ねた。

蜂蜜を求めて村はずれの一軒家まで限なく尋ね歩く祖父  
を見て、人々は驚いた。

「蜂蜜ですって？また赤ちゃんを産んだんですかい？」  
と聞く人々に向かって、祖父は得意そうににっこりして

「ええ、息子ですわい」と答えた。

このように奇異な運命の第一歩を踏み出した父を、祖母  
はとても愛した。すでに3人の息子を持っていた祖母ではあっ  
たが、寺の老僧との思わぬ巡り合わせで儲けた末っ子への  
愛は格別であった。その子が幼い時から格別に利口であっ  
たからかも知れない。

祖母は小学校を卒業した末っ子を遠い寧辺ニョンピョン スンドクの崇徳中学校  
に入れた。ところが3年生になったばかりの年、祖母はわ  
が子を急に呼び戻した。早く帰って家産を継げということ  
だった。

当時祖母は、祖父から小さな果樹園を譲り受けていた  
が、そこから得る収入を元の夫の息子たちが賭博にうつつ  
をぬかしてやたらに使っていたので、最後の望みを伶俐な  
正直者の末っ子に託そうとしたのであった。

こうして父は中学を中退し、商売を始めることになっ  
た。元手は40本のリンゴの木であった。それをどうお金に  
換え、どんな風に増やすかということが企業家になりうる  
か否かを決める腕試しになる。

こう覚悟した父は、賭博におぼれた腹違いの兄たちのリ  
ンゴを切り売りする小商い式の商売ではなく、太っ腹に商  
売を始めた。リンゴを遠くの江界方面カンゲへ運んで売ると近く  
の新義州シンイジュへ持っていく場合よりほとんど倍もの利益を上げ

ることが出来る。江界以北の内陸一帯ではリンゴがととても珍しい果物だったのである。

父は、リンゴを売ったお金を一文も無駄に使わず、祖母にそっくり預けた。どれだけ儲けたかは知るよしが無いが、毎日のように峠道でわが子の帰りを待っていた祖母は、出されたお金を見て目を丸くし、どこかで盗んできたのではないかと聞きただしたほどだったという。

もともと父は大変な節約家であった。食堂や立ち飲み屋にも寄らず、一個のまんじゅうを買うことすらためらったのである。

一切贅沢はせず、利潤にならないようなことに手を出さようなこともなかった。けれども父は決して守銭奴ではない。

バルザックの長編小説『ウージェニ・グランデ』の主人公グランデ爺さんは、人目につかぬ深い夜更けに袋に詰めておいた金貨を取り出して、一枚一枚爪先ではじいてはそのチャラ、チャラという音を聞くのを楽しみとし、そこに人生の快樂を覚えたものだが、父は驚くほどの大金を稼ぎながらも、それをどこにどう使うべきかをちゃんとわきまえていた。

父の最初の商売は大成功だった。父は金儲けの才に恵まれていたようだった。

それ以来父は、いろいろな卸売り業にも手を出して、大企業家の土台を着々と築いていった。その土台を内からしっかり支えたのは、私の母金太福<sup>キム テ ボク</sup>である。

母は牧師の娘で、父と母が結ばれたのは1935年のことであつた。

このことについて簡単に述べておきたい。

紅顔の、血がたぎる青年時代に旧韓国軍の一兵卒として宮城の護衛に当たっていた外祖父金仁求<sup>キムイング</sup>は、日本によって朝鮮軍が強制的に解散させられると、誰かの斡旋で東平壤神学校に入って勉強し、牧師の資格を取るようになった。

このような家庭に生まれた母は、清楚で優しい物静かな性格の持ち主であつた。牧師を父とする家庭に生まれ育った母は、父宋大官との結婚話が持ち上がったとき、父の故郷長興里に連れて行かれてみて、かぶりを振った。みすばらしい村里も商売人だという父も気に入らず、一礼してそのまま平壤に帰ろうとした。そんな娘に向かって父は一言言った。この時の言動は父の性格の一端をよく見せている。父は何事であれ、いったん決心すれば直ちにそのことに着手し、決着をつけずにはおかない性格の持ち主であつた。知恵と決断力を兼ね備えた実業家らしいそんな気質がここでも作用した。父は娘の前に立ちはだかつてこう言ったという。

「平壤へ行きましょう。ここが嫌ならわたしも一緒に平壤へ行く。土地も果樹園もみんな売り払ってね」

唇が厚く浅黒い角ばった顔をした父の、とっさに一生の重大事を決断する男らしい気質に、色白の美しい物静かな娘であった母は、目に見えない太い綱で固く縛られてしまったかのように一言もなくうつむいて足の爪先を見つめていたという。

わたしの両親はこのようにして結ばれ、平壤に生活の根を下ろしたのであった。

わたしの両親の結婚は、祖父母の結婚とどこか似通ったところがあるような感じがする。

僧侶の息子と牧師の娘、仏教徒の子とクリスチャンの娘が企業という一つの目標に向かって新しい生活を始めることになったその日の平壤行きをじっと考えて見るとどうにも奇異な感に打たれる。

その奇異な感をなんと表現すればよいだろうか。わたしに文筆の才のないことが実に遺憾である。

父にはその日の平壤行きにより、新しい活動の舞台が開かれた。まず、平壤市大平テピョンの地で精米業を起こし、ついで卸売り業に力を入れた。営業は日増しに繁昌の一途をたどり、利益が上がり、人脈も増え、ついに企業家として一家を成すに至った。

ところが、それは長続きしなかった。太平洋戦争が絶頂に達し、それに伴って朝鮮人民に対する日本の収奪が急激に強化されたことがその原因であった。

日本人は「脂一滴は血一滴」なる掛け声をもってヒマシ油を搾れ、松脂を取れと騒ぎ立て、朝鮮人の膏血をあくどく搾った。

父の企業もそうした事態の中でのちもさっちもいなくなり、父は絶望状態に陥った。

そのような時、祖国の解放(1945年8月15日)という大きな出来事が起き、父はわが運命が好転するとして歓喜した。

国の津々浦々が連日踊りと歌で沸き返った。示威群衆が町を行進し、「祖国解放万歳！」を叫んだ。随時に処々で開かれる集会や懇談会、野外大会などでは、弁士たちが声をからして新朝鮮の進むべき道について各人各様に説いた。不純分子や反動分子が「愛国者」、「革命家」を自称し、「プロレタリア独裁」を云々するほどだった。

そのような状況を前にして父の喜びは霧散した。共産党が一切の資本を没収し人民の「共有」にしてしまおうとしているという恐ろしい噂が飛び交い、実際に「保安署長」だの、「自衛隊長」だのと称する者たちが押しかけて来て資産家を脅迫し、手錠をかけて連行するという事態まで生じた。父は次第に人々を遠ざけるようになった。

父の知人の<sup>リビョンファン</sup>李炳勲医師が連行されたという噂も聞いた。医院を経営して贅沢三昧に暮らし、日本人女性を妻にしている「親日派」だというのがその理由であった。

私営企業を営み財を築いたとされる父も無事ではいられなかった。ある日、監察課長という人物（解放前平壤税務局の税吏であったという）が銃を持った人たちを従えてきて、家宅捜索をした。

隠してある金の延べ棒と資産の帳簿を出せと迫り、共産党は地主、資本家、親日派はもとより企業家も残らず粛清すると威嚇した。

解放直後の社会はこのように混沌とし、秩序が乱れていた。

不安に駆られた父は、この地を逃げ出し、南のソウルへ行って企業を行おうと決心した。そして、2隻のぼんぽん蒸気船を雇い、セメントや水飴などをぎっしり積んで出発した。隠しておいた金の延べ棒ももちろん持って行った。

まず仁川港<sup>インチョン</sup>に錨を下ろした父は、そこで知人の企業家に会い、人夫を雇ってトラックに荷を積み、ソウルへ運んだ。ソウルでも父の知己たちが何かと援助をしてくれた。

ところがここで意外な出来事が起きた。解放後日本軍に代わって南朝鮮に進駐している米軍政庁が、父に敵産を横領したとして逮捕令を出したのである。

知己の急報を受けた父はいち早く逃げ出し、ある裏通りの屋根裏に身を隠した。当時、米軍政庁は敵産の差し押さえという名で個人の財産まで没収していたが、医薬品、機械設備、セメント、火薬などの敵産に手をつける者は銃殺にも処すると威嚇した。

これに対抗して法に訴えても全然勝ち目はない。そんなことをしていたら、よく行っても監獄につながれるだけだという知己に促された父は逃げるほかなかった。

一体どこへ逃げるというのか……

北から逃げてきた父。それがまた南の地にもいられなくなったのだから、解放祖国のどこにも安住できる所がない。父は前途が真っ暗になった。

当時ソウルでは、祖国に凱旋した<sup>キムイルソン</sup>金日成将軍がまもなくソウルにやってくるという噂が広まり、人々は興奮に沸き立っていた。

「金日成将軍歓迎準備委員会」<sup>ホンミョンヒ</sup>が結成され、洪命熹先生が歓迎準備委員会の委員長に選ばれたという。連日数千数万の市民がソウル駅に押しかけた。その中にまぎれてある日ソウル駅に出かけた父は、駅舎の壁に貼ってある自分の写真を見て驚いた。警察が捜索している指名手配者たちの写真が貼られていたのであったが、父の顔もそこにあったのである。公示文には父が北から送り込まれたスパイだと

されていた。警察があくまでも父を逮捕しようとしているのであった。

父は仰天し憤慨したが、どこにも訴えどころがない。文字通り四面楚歌の窮地に立たされていた。

そんなある日、父の知己が屋根裏に上がってきながら叫んだ。

「宋さん！早く降りてきなさい。早く」

父はついに一卷の終わりだと思った。警察が父の隠れ家を探し出して襲ってきていると思ったのである。下では人々の騒ぐ声がしている。父は茫然として知己の手に引かれて下へ降りた。

父はその時、自分を見ながら笑っている人たちが、手錠や捕縄を持ち、悪意に満ちてせせら笑っている警官の群れだと思えたという。ところが、その人たちは平壤放送を聞くために集まり笑いさざめいていた。

すぐに金日成將軍の凱旋演説が始まるとして、彼らが空けてくれた場所に父は座った。

待つ間もなく金日成將軍の歴史的な祖国凱旋演説が始まった。その日は1945年10月14日であった。父は息を殺して金日成將軍の演説に聞き入った。

その演説の中で金日成將軍が、力のある人は力で、知識のある人は知識で、お金のある人はお金で建国事業にこぞっ

て立ち上がらなければならないと呼びかける太い声が特に胸に強く響いたという。

忘れようにも忘れられないその日を思い返すたびに、父は激情に駆られてこう言ったものである。

「本当に目の前がぱっと明るくなる思いをした。暗闇の中をさまよっていた末ににわかには明るい日差しを受けたような喜びをな。お前たちにはよく実感できないかも知れない。じかに体験した者でなければ分からない。それを言葉ではっきり表現できないのがもどかしい。將軍の演説を放送で聞いて喉が詰まり、ただ涙を流していたわれわれの心情をどう表現したらよかろうか……」

金日成將軍の演説は、それこそ数百万千万の人民の胸を大きく揺さぶった愛と信頼の呼びかけであり、新朝鮮の進路を明るく指し示した灯台であった。

父はその日、ただ涙を流してばかりいたのではなかった。「帰ろう平壤へ、早く帰って建国事業にいささかなりとも貢献しよう」

このように北の地へ帰ることを決心した父は最初、汽車に乗ってまず開城<sup>ケソン</sup>まで行こうとしたが、警官が指名手配者の写真を手にして乗客の一人ひとりに目を光らせていることに気づいて、帰る道筋を変えたという。自分自身も指名手配者の一人だったからである。

こうして江華島に渡った父は、そこで潮が引くのを待つて海に入り、38度線の北の陸地まで泳いで渡ったという。

何が父をしてそのような決断を下させたのであろうか。それに、いかなる力があの荒海を泳いで渡るようにしたのだろうか。

信じ難い話ではあったが、父はそのような英雄談もどきの作り話をしたのではない。

お金のある人はお金を出し、知識のある人は知識を出し、力のある人は力を出して誰もがみな建国事業にこぞって立ち上がろうと呼びかけた金日成将軍のお言葉を噛み締めながら、命がけで荒海を泳いで渡ってきたのは間違いないとわたしは信じている。

その日、江華島まで見送った知己が海に飛び込む父に向かって涙声でこう叫んだという。

「無事を祈っているよ、宋さん！」

北と南に別れる同友の企業家、あの時2人は何を考えていたのだろうか。共にそれぞれの前途にいかに相異なる運命が待ち受けているかは、何一つ知る由がなかったであろう。

父は最期の息をつくまでも、涙で見送ってくれた親友はもとよりソウルや仁川で親しんだ同業者たちの消息は何一つ知ることが出来なかった。

その方たちがまだ生きていて、私の手記に書かれた父のその後の生活を知ったとしたら、ソウルで共に過ごしたことを感慨深く追憶するであろうと思う。

### 光を追って

祖国解放後の最初の春は、人々に新しい希望を与えながら徐々にやってきていた。

死に物狂いで荒海を泳いで渡り、平壤に戻った父は、解放なったわが国にも多くの学校が建ち、大勢の子たちが読み書きを学ぶことになろうと考えた。

読み書きを学ぶには鉛筆がなくてはならない。鉛筆は高が知れたちっぽけなものではあるが、誰にも必ずなくてはならない貴重なものである。父はその小さな一本一本の鉛筆にわが運命をかけた。原料も資材もあった。日本人が敗走する際に捨てていった木材が貨物駅に山と積まれていたのである。

幸運はそれにとどまらなかった。貨物駅から帰ってくる途中雨に見舞われてある家の軒下で雨宿りをしている時、その中に大工と旋盤工、それに電機工場で作っていた人など3人の人が職を求めていることを知った。

父は喜んだ。よし、この人たちさえいれば今すぐにも鉛筆を作れると。彼らは3人とも父の誘いにその場で応じた。

父は当時平壤市西区域のある建物を借り、木工旋盤と送風機も買入れた。労働者は8人で黒鉛は江界から仕入れた。

その後間もなく鉛筆の生産が開始され、鉛筆には「三千里」という商標がつけられた。三千里のわが祖国にちなんでそうつけたと父は言った。

素朴な気持ちで名づけたその「三千里」鉛筆は小さな物に過ぎなかったけれど、それが父の一生を金文字で輝かせ先駆けになろうとは夢にも思わなかった。

当時工場の日当たりの鉛筆の生産量は300本であった。鉛筆が作られているという噂が広まり、さまざまの人たちがこの無名の鉛筆工場を訪ねてきた。

鉛筆工場が作られて生産を始めたということが、すぐ金日成將軍に報告されることになるとは、父は全く思ってもいなかった。

後日知ったことだが、最初に金日成將軍に「三千里」鉛筆のことを報告したのは、抗日の女性英雄金正淑女史キムジョンスクであった。

女史は將軍に自分が先に工場へ行ってみますと言って、幼い金正日キムジョンイル総書記を連れて普通江ポトンのほとりの小さな鉛筆工場を訪れた。

その日、金正淑女史と幼い金正日総書記に随行した一幹

部の回想記にも述べられているが、父が始めた鉛筆の生産が金日成將軍に非常に大きな喜びを与えたということ、父は少しも知らなかった。

そのしばらく後の1946年2月3日は、父の一生が決定された運命的な日であった。

この日の昼時、父が工場の門を出たところ、その前に車が1台走ってきて止まった。

車を降りた人は自分の前に近づいてきたが、父はその方が全朝鮮同胞が民族の太陽と敬ってやまない金日成將軍だとは思ひもしなかった。

すらりとした背丈にコートのスそをなびかせながら闊達に歩み寄る若い方は黒いシングルの洋服を着ていたが、明るく輝く目と秀麗な容貌、印象深いえくぼなど、すべてが尋常ならぬ人柄であった。それに、どこかでお会いしたことがあったような親しみを覚える姿であった。

息を殺して見守っている父に近づいたその方はまず、ここが鉛筆工場なのかと聞き、宋大官氏に会いに来ましたが、今工場にいられるでしょうかと尋ねた。父は驚いた。自分の名前をどうしてご存知なのだろうかといぶかった。

「はい、わたしが宋大官です」と父は、喉が詰まるような思いで唾をごくりと飲み下して、やっと答えた。

するとその方は明るく笑って言った。

「ああ、そうですか。このようにお会いできて本当に嬉しく思います」

その時になって父は初めて気づいたという。明るい精気の溢れた秀麗な目鼻立ち、その顔に浮かぶ優しい微笑、太い声、知性的な瞳、高潔な人品……あっ、この方は金日成将軍だ！

目の前にまぶしい閃光がきらめいたような思いがした。突然胸が膨らみ、心臓が高鳴った。将軍に手を固く取られながらも、父は感激に目頭が熱くなり、挨拶の言葉もまっとうに述べることができなかった。

将軍は、「鉛筆を作る現場をちょっと見せていただけませんか」と言った。工場とは名ばかりで、労働者たちが黒鉛の粉末にまみれ、石炭の粉をかぶって働く不潔な作業場に過ぎなかった。

将軍は微笑をたたえて、機械の音の騒がしい作業場へ先に立って歩みを移した。父はあわててその後に従った。

しばらく作業場を見回していた将軍は、手かんなで鉛筆の軸に角を入れている所に足を運び、「ご苦労様です、立派なものを作っていますね」と労をねぎらい、何人で働いているのかと尋ねた。

父が8人だと答えると将軍は、「工場の生産面積はどれぐらいですか」とまた尋ねた。

約350平方メートルだという答えを聞き、軸木に芯入れ溝を掘る機械かんな盤の前に立って作業を見つめていた将軍は、木材と黒鉛はどこから運んでくるのかと尋ねた。

父は、木材は江界一帯の各地方から仕入れ、黒鉛も江界の東方<sup>トンプン</sup>鉸山のものを使っていると答えた。

将軍は、シナノキで鉛筆の軸木を作っているのを見て、「赤松で鉛筆の軸を作っても結構です」と言い、続けて一日の鉛筆の生産量を尋ねた。

1500本を生産するという父の答えには、「黒鉛はわが国に豊かです。わが国に豊かな原料をもってわれわれの手で鉛筆を作っているのだから、なんと素晴らしいことでしょうか。黒鉛は江界のものがよいのです」と言った。

そして、一本の鉛筆を手にして、「われわれが山で戦っていたとき、こんな鉛筆が足りなくて遊撃隊員たちは砂に字を書きながら読み書きを覚えました。鉛筆は実に貴いものです。解放なった祖国に戻ってきて鉛筆のことで心配していましたが、<sup>カンリャンウク</sup>康良煜先生からこの工場で鉛筆を作っているという消息を聞き、嬉しくて訪ねてきました」と語った。

ついで将軍は、鉛筆の芯を作る所に行ってみようと言った。父が、そこは汚れていて困ると差し止めると、将軍は、「芯を作る所が汚れているとのことですが、われわれは鉛筆の生産工程を見に来たのだから、そんなことはお構

「ありません。大丈夫です」とし、芯を焼く石炭乾燥炉の前で働く労働者たちと挨拶を交し、石炭炉を電気を用いる炉に改造すべきだと言った。

鉛筆の芯が機械から押し出されるのを注意深く見ていた将軍は、父と労働者たちにこう言った、

「皆さんこそ隠れた愛国者です。鉛筆問題を解決するのは単なる実務的なことではなく、新しい民主朝鮮を成功裏に建設するための非常に重要な政治的問題です。日本帝国主義の植民地奴隷政策により、北朝鮮には230余万の非識字者がいます。われわれは数百万に達する大事な子供たちを勉強させなければなりません、一番懸案となっているのが鉛筆です。これまで朝鮮人民は、日本帝国主義の暴虐な統治の下で腰が曲がるほど苦勞しながらも、読み書きを学ぶことができずに生きてきましたが、子供たちには鉛筆を持たせて学校に通わせたいと願っていました。これは、自分の国で自分の土地を思う存分耕したいという農民の一生の願いと同じようなわが人民の切なる念願でした。われわれは、人民のこのような念願を叶えてあげるべきです。鉛筆がなくて子供たちの教育に支障をきたすようなことがあってはなりません」

父は正直に言って、鉛筆工場を設けて運営しながらも、企業の前途については確信を持っていなかった。

ところが、この日、鉛筆工場を訪ねた金日成将軍は立派なことをしていると激励し、父を隠れた愛国者だと賞賛した。

そして、鉛筆をつくるのは単なる実務的な問題ではなく、国の将来と興亡にかかわる重大な仕事であるとし、建国事業に大いに寄与するよう導いたのである。

仕上げ作業場にゆっくり歩み移した将軍は、鼻をつくほどのかわやラックの臭いの中で鉛筆にラックを塗っている労働者の挨拶を受けたあと、色とりどりの鉛筆が積まれている完成品の中から一本を抜き取った。

しばらく鉛筆を見つめていた将軍は、手ずからその鉛筆を削って手帳に字を書いてみた。ところが、鉛筆の芯が堅くてよく書けなかった。

将軍は、「鉛筆に欠陥が少々あるとしても、わが国の人たちが自力で初めてつくった鉛筆という意味では成功です」と満足げに言った。

この激励の言葉に父は、感動のあまり眼に涙をたたえて将軍を仰ぎ見た。

父の肩に手を乗せた将軍は、「ことわざにもあるように、最初のひとさじでおなかはふくれましようか。引き続き努力するならば上質の鉛筆を作ることができます」と言って父を励ました。

今後上質の鉛筆を作るという父の決意を聞いた将軍は、生産した鉛筆はどう処理するのかと尋ねた。

当時生産された鉛筆は各道から商人が買い取っていたが、生産量が少なくて需要を満たせない有様だった。父からそのような実態を聞いた将軍は、鉛筆をより多く作るには今後国家が何を助ければよいのかと尋ねた。

父は、トラック一台と江界地方の赤松林の採伐承認を受けることと、日本人が経営していた敬臨洞キョリンの大根漬け工場の建物を利用できるようはからってもらいたいと答えた。

将軍は、「今後国が大きな建物を提供し、トラックや電気炉などの各設備の問題も解決します。そして江界地方の伐採林や某鉱山の黒鉛も配当しますから、上質の鉛筆をどしどし作り、他の企業にも積極的に取り組んでみなさい」と言った。

この日、父と労働者たちを激励した将軍は、昼食の時間がかなり過ぎて工場を後にした。

父は心の中で熱いものを飲み込み、将軍の車が見えなくなるまで見送った。

その17日後の2月20日、鉛筆問題が最初の議案として取り上げられた歴史的な北朝鮮臨時人民委員会第1回会議が開かれた。

金日成将軍は後日、歴史的なこの日の会議を感慨深く振

り返り、次のように語ったという。

——鉛筆問題を解決するために、わが党が解放直後から今日までどのように努力してきたかをはっきり知る必要があります。以前日本帝国主義に抗して武装闘争を行っていた時、われわれは祖国の解放後に鉛筆のような問題が深刻に持ち上がるとは思っていませんでした。ところが、国の解放直後に大勢の非識字者を無くすためには鉛筆が切実に必要なのに、わが国に鉛筆工場がないため、北朝鮮臨時人民委員会を組織した直後、最初の会議の議案に鉛筆問題を上程して討議しました。——

金日成将軍は解放後、新祖国の建設に取り組み、あまたの問題に忙殺されていた中でも、小さな鉛筆問題をそれほど重視したのであった。

ところが父は早くもその小さな鉛筆に注目し、極めて小規模ながらもその生産を始めていたのであった。ある日わたしが父に、どうして鉛筆に関心を持ったのかと聞いたところ、父は「お金が見えたんだ」と笑って言った。

お金が見えた！鉛筆にお金が見えたと？もちろん利益を目的にしない企業家などは有り得ない。ところで父は目を潤ませて語をついだ。力のある人は力で、お金のある人はお金で、知識のある人は知識で建国事業に貢献しようとした金日成将軍の放送演説を聞いて目の前がぱっと明るくな

り、それで死に物狂いで荒海を泳いできたのだと。

1946年4月16日、将軍は北朝鮮臨時人民委員会書記長の康良焜先生に、鉛筆工場にどうしてトラックを配当していないかと聞き、他の所に配当できなくても鉛筆工場から先に配当しなければならないと言った。

その後、康良焜先生を再び呼び、今日中に鉛筆工場にトラックを必ず送らなければならないとし、工場を立派に運営して鉛筆の品質も高め、生産もより多くするようにという自身の言葉を鉛筆工場の主人に伝えてほしいと言った。

父の工場のために慈江道の五佳山の林地と某鉞山の黒鉛をすでに配当していた上にまた新しいトラックまで入手して送った将軍は、これに満足せず父の企業を盛り上げるための資金も全的に提供する措置を講じさせた。

父はただ金儲けを目的にして鉛筆工場を建て、利益の一部を国に納めればよいと思っていた。金儲けを考えないなら、それは父とは言えなかった。

ところが金日成将軍に見いだされ、自分を信じて押し立てていただいたことに感動した父は、金儲けしか知らない企業家から民族的な良心に燃える愛国的な企業家に変身し、お金しか見えなかった父の目は真正な人生の道をしつかりと見はるかし、父の足は広くも堅い人生の軌道に確実に踏み入ったのであった。

いつしか普通江畔の平壤鉛筆工場は連日全国各地から仕入れにくる人たちでにぎわった。鉛筆を商店に出荷するだけのゆとりもなかったという。風呂敷包みや背負い袋、トラックで運んでいった人たちはすぐにまたやってきた。生産量は増え、鉛筆は連日山と積まれた。

それだけ利益も莫大であった。にもかかわらず父はその鉛筆工場を江界に移して他人に譲った。木材と黒鉛など主要な原料や資材は江界から輸送して来なければならなかったので、国家的利益の見地から工場をそちらへ譲ることにしたのである。

鉛筆に代わって父は、ガラス業（ガラスを溶かしそれでさまざまなガラス器具を生産した）とゴム業に手をつけた。

当時人民生活に欠かせないガラス製品や履物などが不足し、金日成将軍がそのことで心配していると知ったからである。

ガラス工場とゴム工場も建てられた。把握のない企業ではあったが、経験のある労働者や技術者を募集して生産を始め、今度も予想以上の利益を上げた。

鉛筆の場合と同様、日常生活に欠かせない製品のその大きな需要がもたらした結果であった。需要が金を生み、金が金を生んだ、工場の規模が拡張され生産量の伸びに比例

して売れ行きも大きくなったのである。こうして父はお金の山に座って生きるほどになった。

ではその大量の金が再び父の目を濁らせ、その心を縛りつけて昔の父に返らせたのではなからうか？

実際新しい企業の開発をもくろんで父を訪ねてくる人たちもないではなかった。中にはソウルへ行こうと、有力な紹介状を持って南からやって来た人もいた。以前出された米軍政庁の逮捕令は誤解によるものだった、ある腹黒い男の告発で生じたもので、今は不問にされている、宋先生のような方は南で企業を起こせば大きく成功し、屈指の長者になれるであろう、だから自分と手を携えて一つ頑張ってみようと言う者もいた。

しかし父はせせら笑い、きっぱり拒絶した。父には魅せられた世界があった。それは、偉大な愛と信頼にわが全精神を傾けて報いようとの信義の世界であった。

父はあの苛酷を極めた戦火の中でも揺るぐことがなかった。その厳しい試練は最終的に父をテストした。

狂ったような敵機の爆撃と機銃掃射、戦略的な一時的後退、北に侵入した敵軍の野蛮な殺戮……

敵はそれが誰であろうと、宗教家であれ、企業家や医師であれ、民族的な志操を抱いて良心的に共和国を支持する人であれば、うむを言わずに捕らえ、虐殺した。

共和国に反対するとさえ一言言えば、死を免れると脅迫した。それは信念と信義を試す苛酷な試練の日々であった。そこには正反対の二つの道があった。一つは富貴栄華への道であり、今一つは死への道であった。

しかし父は、祖国を選ぶ道が決して死への道であるとは考えなかった。

金日成將軍さえ健在なら祖国は必ず勝利すると固く信じていた。こうして金日成將軍に従って微力ではあるがあくまでも戦争の勝利に貢献すべく必死になって働いた。

敵機の爆撃にさらされながらも食糧を購入しては、軍需工場の労働者や戦災民を支援した。

父はガラス工場の生産が途絶えてはと苦慮し、敵機の猛爆撃の最中にも工場を離れなかった。こうして前線に必要な各種の注射器やアンプル、それに数百万個の電球を生産し、ゴム工場では履物などのゴム製品が休むことなく生産された。

戦争の末期、父はゴム工場を開城へ移した。後日、その理由について父はこう説明した。

「われわれの工場の煙突から煙が上がっていることを敵に見せるためだった。見ろ。金日成將軍が導くわが共和国は、全土が灰燼に帰してはいてもこのように生きている。工場が黒い煙をもくもくと吐いているのを見ろ、と叫びたかったのだ」

こうして開城のゴム工場の煙突は戦争の最中にも煙を吐き続けたのである。それを見て、敵はなんと思ったであろうか。

父はそれを、自分の生涯における最大の誇りの一つだともみなしたものである。父はゴム工場を開城に移して煙突から煙を吐き出させた話をする時にはいつも興奮してこぶしを握り、叫ぶような声で語ったが、そのゴム工場から上がっていた黒い煙を、わたしは見たことがない。

けれどもそのことを想像すれば、お金の山に火をつけて信念の炎を燃やす父の姿が目の前に浮かんでくる。お金しか知らない企業家であった父が物質的な利潤を惜しげもなく燃やし、朝鮮人民の精神的な意志を盛り上がる雲のように噴き出す愛国的な商工人に変貌したのである。戦後、父はそのゴム工場を開城市人民委員会に移管した。父の目的は遂げられたのである。

「疲れを知らなかった。金日成将軍がおられる以上、われわれは必ず勝つと信じていたので、何をしても張り合いがあったよ」と父は口癖のように言った。

戦時中、父は巨額の資金を投じて食糧や被服などを購入し、前線に送りもすれば、大量の金を前線援護金として献納もした。

わたしの手元にはその時の献納明細(当時の貨幣)がある。

1950年8月	30万ウォン
1951年12月	35万ウォン
1952年12月	150万ウォン
1953年4月	300万ウォン
計	515万ウォン

父の愛国的素行を称えて、金日成将軍は、停戦間もない1953年8月、父を招いた。

丁重に挨拶する父の両手を取った将軍は、「久しぶりです。戦争の最中、苦労は大変なものだったでしょう」と言い、こう続けた。「戦争のあの苦しい環境の下でも宋大官先生は数百万ウォンを超えるお金を前線の援護に献納されたという話を聞きました。実に立派なことをなされました」

父が身に余る賞賛にうろたえるのを見た将軍はほほ笑み、戦時のあの苦しみに満ちていた時に、どうしてそんなにも多くの金を毎年前線援護金として献納できたのですかと尋ねた。

父は厳しい戦争の日々、胸の奥深くに刻んでいたわが固い信念についてこう吐露した。

「将軍！わたしは、祖国がなくては個人の財産も光を失うと思いました。亡国の民になれば億万の金があってもなん

の役に立ちましょうか」

父の答えに將軍はたいそう満足し、「宋大官先生のような愛国的企業家をはじめ全国の人民の物心両面における積極的な前線支援があったればこそ、われわれは戦いに勝つことが出来たのです」と力を込めて言った。

その時父は、全世界を得たような心情だったとし、あまりにも大きな激情に駆られ、心臓の鼓動の音まで聞こえたという。

もったもなことである。父は確かに全世界を得た。億万の金を以ってしてもあがない得ない偉大な愛と信頼の世界を、愛国のまことを捧げて得たのである。

父は自ら見いだしたこの生の真理を大空に刻むことができぬまま世を去ったが、今この娘が父に代わって世の人たちにその生の真理を声高く伝えているのである。

## 2. 後ろを振り返るな

この世にたやすい仕事などない。それは、いかに働くかということにかかっているだけである。いやな思いですとか、強制によってやることはいかに楽なものであっても苦しいと思うが、好んですることはいくら力に余るようなことも疲れを覚えないものである。

自分がすることを愛すべきである。自分の仕事を愛するという言葉が適切な表現であるかどうかは分からないが、わたしはそういうふうに表示したい。愛する仕事なら骨が折れるはずはないと思う。

「しんどいなど言っではいかん」幼い頃からわたしはこの言葉を、父から耳が痛いほど聞かされてきた。父から初めてこの言葉を聞いたのは、わたしが八つになった頃だったと思う。父はわたしの年を増やして、当時の平壤芸術学院の舞踊組に入れてくれた。

当時創作された音楽舞踊叙事詩『栄えあるわが祖国』の舞台に、わが芸術学院の生徒たちも賛助出演したが、有名な舞踊家崔承喜チェスンヒの指導は厳格を極め、過酷だと言えるほどだった。

一日中汗水たらして稽古をすると、塩漬けの白菜のよう

にぐったりとしてしまったものだが、そのたびに父はリフレインのように「しんどいなどと言っではいかん」と口癖のように繰り返した。

それはあたかも「働かざる者は食うべからず」という言葉と同様に、父の一生の体験が集約された教訓であったかも知れない。実際、父はいつもわが仕事を愛していた。仕事しか知らないという言葉は、いわば仕事を何よりも愛するという意味ではなからうか。今この文をつづりながら父の一生を思い返してみると、父にとって何よりも厳しかった試練の時期は朝鮮戦争の時であり、最も骨の折れた苦しい時期は朝鮮戦争後の日々であった。

### 運命の転換点で

すべてが破壊され、灰燼に帰した。父が経営していた工場も例外ではなかった。3年間の戦争はこの地のすべてのものを破壊し、焼き尽くしてしまった。煉瓦を拾い集めて崩れた壁を積み直し、屋根を葺き、煙突を立て、壁の上塗りをするのは大した問題ではなかった。

何よりも重要なことは機械・設備を新たに備えつけることであったが、全国の工場・企業が見る影もなく破壊されていた事態の中で、発動機や電動機を手に入れることは、想像すらできない難事であった。

ところが父はここで他の人たちとは異なる企業家魂を発揮した。戦時、元山ウォンサンの近海に船が何隻か沈没したという噂を耳にした父は、昼弁当を持って大同江テドンへ行き、朝から日暮れまで休みなく潜水の練習をした。

全平壤市が復興建設で沸き、人々は煉瓦を背負い子に一杯載せて走ってはまた走って働いていた時期であった。そのような時に企業の鬼と言われていた工場主が毎日一日中水遊びをしていたのであるから、それを知った人たちはどんなに驚いたことだろうか。頭がおかしくなったに違いない、と人々はささやきもした。朝夕道で出会えば挨拶を交わしていた人たちも父に会うと、目をぱちぱちさせてどう挨拶したものかと戸惑うほどだったという。

ところがその数日後からまた変なことが起きた。昔の武士のかぶとのようなものやゴム製の服に重い長靴などを背負って大同江へ行くようになったのである。

こうして人々は、父が戦争中こっそり大同江の底に隠しておいた金の延べ棒を探すためにそんなことをしているのだろうと噂した。大同江と普通江の合流している辺に企業家宋大官が沈めておいた金の延べ棒数十キロがあるとささやかれたほどだった。

そんな人たちには目もくれず父は、15日余り潜水の練習をして、元山に向かった。潜水夫を雇ってもよかつたろう

に、どうして自分独りで海底に潜ろうとしたのかと疑問に思う人がいるかも知れないが、その訳は単純である。企業家である父は、戦時中に沈没した船の何に利用価値があるのか、それらは引き上げることができるかどうかをわが目で確かめたかったのである。父は元山の海でまた15日間ひどく苦労した。

初めての潜水作業だったので時には耳から血が出ることもあったという。こうしてついに利用しうる機械設備を探し出し、その位置も確定した上で潜水夫と機械船を雇った。引き上げた物の中で一番大きく価値のあったのは発動機であった。

それらを平壤まで運ぶために長い定規を作り、それを杖代わりにして歩いて元山を出発した。元山から平壤までの途上にあるすべてのトンネルの高さをもれなく計らなければならなかったのである。

トラックの荷台の高さ（車の種類によって異なる）と、その上に載せる機械・設備（特に大型発動機）の高さ、それにトンネルの天井までの高さを残らず計って手帳に書き込んだ。2カ所が少し低かったが、それを通過するに足る車を選び、機械を置く台木の高さを少し低く調節することにした。

このようにしながら父は平壤までの数百キロもの道を歩

いて帰ったのである。足は腫れ、唇はかさかさに乾いてひび割れがし、血がにじんでおり、靴ブラシのような黒い髭を生やした父が帰った時、人々は驚いた。そんな蛮人さながらの異様な顔つきで大声で愉快そうに笑ったのだからみんなびっくりしたという。

このようにして運んできた機械・設備は当時どこを探してもないような貴重なものだった。工場は直ちに稼働を始めた。今度も父の企業はいち早く活気を帯び、以前の水準をずっと上回った。利益が急上昇したことは言うまでもない。

戦後の国の苦しい経済事情の中で私営企業の財力が大きくなるのは、とりもなおさず人民生活と破壊された国家経済を立ち直らせる上にも大きく寄与したということ、わたしは強調したい。しかしそのようには考えない人たちもいた。

当時は、資本主義的商工業を社会主義的に改造する措置が積極的に進められていた時期であった。あの時大多数の企業家や商人はさまざまな手段と方法を以って勤労人民大衆の利益を侵していた。彼らは農村から果物や食肉のような物を安価で仕入れて高い価格で売り、一部の企業家は国に納入すべき生産品を個人商に高い値段で売ることをしてきた。また一部の企業家は、政権機関内の不純分子

と結んでわが腹を肥やすべくあくどく立ち回り、中には二重帳簿を作って国家を欺瞞し、納税の義務を果たさなかった。彼らは主に地域の違いによる価格の差を悪用して投機し、詐欺をこととしながら、生産協同組合への加入を避けていた。

1956年4月、金日成主席は朝鮮労働党第3回大会で、進展する革命の要請に即して資本主義的商工業を社会主義的に改造する方針を打ち出した。

そのような時期だったので、父の私営企業を色眼鏡をかけて見る人たちがいたのは驚くべきことでなかった。一部の幹部は、国の解放直後から今日に至るまでどの企業家よりも主席から大きく目をかけられてきた父が、当然先頭に立って朝鮮労働党の社会主義的改造方針を支持し生産協同組合に入らなければならないはずなのに、まだ入ろうとしないのが理解できないとして首を傾げた。

この事実についての報告を受けた主席は、1957年10月中旬のある日、党中央委員会の一幹部を父が経営する工場へ送って実態を確かめさせた上で、父についておよそ次のような話をした。

……誰よりも先に協同組合に入らなければならない人が未だに私営企業に専念しているとして疑問を抱く人たちがいるかも知れません。わが党は、戦後農村における協同

化とともに私営商工業の社会主義的改造も力強く推し進めてきました。私営商工業は個人農とは違って業種が多種多様である上、それに従事する人たちの出身もさまざまであり、経済的な土台や思想・意識水準にもいろいろと差があります。それでわが党は、わが国の商工業者たちの実情に即して生産協同組合の形態を三つに分けて規定しなければなりませんでした。ところが宋大官さんは、第1形態はもとより、第2形態にも入ることができず、第3形態に入ることもまだむずかしいと言っています。

第1形態は主に零細な手工業者たちからなる協同組合ですから、ある程度の資産を持っている彼には合いません。

第2形態は半社会主義形態で労働の質と量によって分配するだけでなく、そこに投資の大きさも計算に入れるので宋大官さんの場合は分配を受ける量がかなり多くなり、わずかの資金・機械・設備を持って入ってきた人たちはそれより配量がずっと少なくなるので、彼の良心は第2形態に入ることも許しませんでした。

それに第3形態は生産手段と資金を最初から組合の共同所有とし、労働の質と量によってのみ分配する完全な社会主義形態であるため、政治的に準備のできていない私営商工業者はそれに進んで入ることをためらいました。

宋大官さんは第3形態に入ろうにも入ることができま

せんでした。独りでは協同組合を作れないではありませんか。……

続けて主席は、わが党の協同化方針が打ち出された時、宋大官さんは他人より早く自分が所有している資金と生産手段を一銭のお金も受け取らず、全部国に差し出すと言ったものですが、他の商工業者に及ぼす影響を考慮して、当分私営企業を営みながら、やがて高い形態の協同組合に入る場合、比較的大きい規模で生産協同組合を運営しうる必要な準備を行うようにさせたのです、と語った。

この時主席は、父が戦時に注射器とアンプルを大量生産して戦時の需要を充たすことに努めたことと、農村で稲の冷床苗を導入する際、製紙工場を建てて苗代用の油紙を生産して農村に送ったこと、それに各種のガラス製品を生産して社会主義建設を積極的に支援したことを改めて大きく称えたという。

主席の信頼のこもる言葉を伝え聞いた父は、主席の愛に包まれて生きる企業家の幸せをいまさらのように覚え、新たな決意を固めた。

(これまで自分は「金のある人間」として建国事業に尽くすべく努めたが、今は「金のある人間」だけではなく「力のある人間」にもなった。自分の経営する工場の仕事スムーズに進むならば、金日成将軍の意向をいっそう立

派に貫くことができる。もっともっと力を尽くして働き、また働こう。早く協同組合を作って社会主義建設に積極的に寄与しよう)

こうして父は間もなく平壤工業品生産協同組合を組織し、その際出資金500万ウォンを全部組合に出した。

父は一私営企業家から祖国と人民のために尽くす社会主義的な勤労者へとわが運命を転換し、さらに一步大きく歩を進めたのであった。ところでその大きな一步は、決してすらすらと踏み出されたのではない。

実際500万ウォンの大金を残さず組合の資金として出すことを決意するまで父はいろいろと考えたという。その500万ウォンは父の全財産であった。それをすべて出せば自分には一銭の金も残らなくなる。以前は数百万ウォンもの援護金を献納していても、父には企業用の資金は手元に残していたのである。とはいえ、今や社会主義的経営形態である生産協同組合に加入した以上、そこに私営企業なるものは存在しなくなる。だから私営企業に必要な資金を残しておいても何ら用をなさないのである。

こう考えながらも父は7人の子を持つ親である。その子らにたとえ幾らかでも遺産を残してやりたかった。当然である。

婚礼をあげるわが子たちのための結婚費用はもとより、

その後の家庭生活に必要な家具調度や台所用品を準備してやりたいという思いがなぜなかったろうか。そのことで誰が非難するだろうか。わが子を育てる親としてこれは当然なことではなかったろうか。にもかかわらず、父は所有していた金を全額組合に納めたのである。

父はこのことについて、1959年10月中旬、主席の臨席のもとに開かれた全国地方産業部門及び生産協同組合熱誠者大会で発言し、当時自分が悩んだ事実を率直に打ち明けた。

「わたしは管理委員長として昼は組合で社会主義をし、夜はわが家に帰って数百万ウォンの金をどうすべきかと思ひ悩みながら資本主義に引かれていましたが、その金を全額組合に納めてみると、千万斤の重みに耐え切れなかった肩が一瞬にして天に舞い上がるかのように軽くなった思いがしました」

父の発言を聞いた主席は豪快に笑い、「宋大官さんが所持金を全額組合に出したのは大変結構なことでした」と称え、真っ先に拍手した。

ついで場内は嵐のような拍手にどよめいた。この満場の拍手は、父が歩んできた愛国の道への惜しみのない賞賛であり、今後の真の人生行路を祝福し、励ますものであった。

父は働いても働いても疲れを知らなかった。父はわが子たちに、自分の仕事を変わりなく愛するのだ、そうすれば疲れを覚えない、疲れたなどとは言わないといつも言って聞かせた。

父はまさにそのように誠実に働いた。自分が稼いで得たお金の全部を国に捧げ、良心も捧げた。いかなる名誉も地位も望まず、ひたすら祖国と人民のためにあくまでも誠実に働いて生きた。

そうして多くの人たちから粛清対象とみなされていた資産家、私営企業家であった父が朝鮮労働党の隊列に加わった。つまり、過ぎし日のお金しか知らない企業家が愛国者になったのである。

### 人生の老年期にも

1961年に父が管理委員長として働いている組合は、各種のガラス製品を生産する光学ガラス生産協同組合と改称された。

1969年3月初旬のある日のこと。

金日成主席は党中央委員会の一幹部に電話をかけて、今、年老いた党员たちは老眼鏡がなくて字もまともに読めない有様だ、眼鏡や老眼鏡を作る所もなければ、売ってくれる所もない、君が平壤光学ガラス生産協同組合に行つて

眼鏡や老眼鏡を生産できるかどうかを確かめるのだ、そして眼鏡を作るためには足りないものは何であり、解決すべきものは何か、それが解決されればどれほど生産できるかについても相談してみるようにと言った。

主席の言葉を伝え聞いた父は、愛情と信頼がこもるその志に目頭が熱くなった。良心の呵責も大きかった。組合が光学ガラス生産協同組合であるからには、人々にぜひ必要な眼鏡に当然関心を向けなければならなかった。ところが、誰よりも需要に敏感な父が、眼鏡に別して注意を向けていなかったのである。

全国の工場、企業が自動車やトラクター、ブルドーザー、掘削機、電気機関車などを大量に生産し、それら工場の古くて狭い正門を立て直さなければならないような頃であった。

電気炉では鉄湯が沸き、海では新しく組まれた漁労船団が漁獲をし、数千トンプレスが地心を揺るがして威容を誇っていた時である。そのような時局だったので、眼鏡のようなものには誰もほとんど関心を向けなかった。そんなものはささいな副次的なものだとみなされていたのである。

主席の教示を伝え聞いた父は、自分がその高い志を全うするにはまだまだ遠いと思い、拳骨でわが胸を叩いたという。父は手帳の第一ページに眼鏡に関する主席の教示をし

たためて持ち歩いた。

常に人民に思いを致す主席の慈愛にあふれた偉大な風貌が彷彿とし、人民の中で、人民と生死苦楽を共にする主席の念願が深くこもるお言葉を噛み締めながら父は、設備を購入し技術者たちを探し出すべく、昼夜を分かたず奔走した。

そのような時、主席から有能な技術者や重要な設備を贈っていただいた。このように今度も新しい企業の土台は主席がじかに整えて下さったのである。

勇気百倍した父は早速生産を開始した。その時父は、眼鏡の生産に忙殺され、脇目をするいとまもなかった。目の中に入れても痛くない程かわいがっていたこの末娘の将来問題にも注意を向ける暇がなかった。

父が末娘のわたしをなんとしてもアーティストに育てようとしていたかは、先にも述べた通りであるが、最初父はわたしが舞踊家になり大劇場のステージで蝶のように踊って嵐のような拍手喝采を受け、花束に埋もれる姿を描いてみたという。娘が育ちながら体が太り始めるのも見ようとしなかった。

ところが、父は芸術学院に来てみて、末っ子のこの聖姫が有名な舞踊家になる望みはないと知り、音楽組に移るようにしてくれた。

国立交響楽団のチェロ演奏家（当時わが国で最高だと言

われた李英洙<sup>リヨンス</sup>）を毎夕わが家に招いてわたしの指導してもらいもするなど、この末娘のことでは驚くほど父は熱心であった。ところが眼鏡の生産を手がけてからは、わたしが平壤芸術学校を卒業することになっても一向に関心を向けなかった。

李英洙先生の指導まで受けたわたしが、チェロの演奏では断然第一人者と言われるほどになったと知って安心していただけだろうか。一度人ごとでもあるかのように「音楽大学に行くべきだな」と言った。わたしはかぶりを振った。

「いいえ、嫌です」

父には意外な返事だったろうが、それでも驚きはしなかった。多分驚く心のゆとりもなかったのであろう。

父は当時年産100万個の眼鏡の生産を目標にして昼夜を分かたぬ奮闘をしていた。父の思いは常に眼鏡のことにのみ向けられていた。それでわたしが「いいえ、嫌です」と言った言葉も「ええ、そうします」と聞いたのかも知れない。

ただ父は、主席の念願とあらば万事をさしおいてそのことに専念した。まして父は誉れある朝鮮労働党員ではないか。

1か月ほどして大学勉強はどうしているかとわたしは聞か

れた。今度も手帳に何か数字を書き込みながら、軽く一言聞いたのである。わたしは、まあまあですと答えた。父の問いに対する返答にしては曖昧な言いぶりであったが、父はそれ以上何も聞かずにペンを動かしているだけだった。

さらに1か月ほど過ぎた。父の光学ガラス生産協同組合が、100万個の眼鏡の生産目標を達成する少し前のことであった。その時になって初めてわたしが牡丹<sup>モラン</sup>高等医学専門学校に通っていると知って父は啞然とした。

「音楽大学ではない？じゃ、チェロは？」

わたしは笑いながら専攻を変えた訳を話した。それは全くあきれられるような理由であった。

「わたしが有能なチェロ演奏家となり、外国公演を終えて帰ってくる時の姿を想像して見てよ。楊柳の葉のようなすらりとした女性アーティストたちに挟まれて甕のようにぶくぶくしたわたしが旅客機のステップを降りてくると考えたら息が詰まりそうになっちゃったの。思っただけでもぞつとしちまったの」

わたしの返答を聞いて、父は驚いた。「へえっ」と異常なほどのため息をつき、「それじゃお前たちはそろって医学を専攻するというわけか」と苦笑して、それ以上なんとも言わず工場へ出かけた。

主席の切望をなんとしても貫くための火花の散る生産が

行われていた時だったので、父はあの日わたしに長く話をするゆとりがなかったのであろう。

ついに100万個の眼鏡を生産し、主席に報告して身に余る賞賛と感謝を受けた日、父はわたしたちにこう言った。

「眼鏡は大きな物ではない。価値の大きな貴重品でもない。けれども、主席にとって大切な宝だと思えてな。これでわしの目も明るくなったようだ。ただのガラス玉にも人民に注がれている大きな恩を見ることができたのだ」

それから10年の歳月が流れて、わたしは眼鏡を専門に生産した父からその日聞いた眼鏡のレンズとそこに注がれた主席の大きな恩愛について時々考えるようになった。父は確かに、主席が党员としての自分に、心から人民を思う明るい目を持ってと教えてくださったと、話したかったのであろう。

昨日は金に縛られていた父の人生行路を真の愛国の道へと導き、今日はまた金を目的にしていた父の目を、心から人民のためを思う労働党员としての目を明るく開いてくださった主席！そのような偉大な懐に抱かれて父は、力強い足取りで自分の後半生を誇らしく歩んだのである。

生後19回目の春、高等医学専門学校の卒業を間近にし、わたしが家にこもって卒業試験の準備をしている時、父が入ってきた。何かとても興奮している気色であった。

勉強に熱中していたわたしは、どうしてこんなに早く帰ってきたのかと聞いた。父は工場へ行く途中ちょっと寄ったとして思いがけなくわたしに一つピアノを弾いてくれないかと言った。

わたしは驚かずにいられなかった。兄たちのように医師の道を選んだわたしが初めて父に、ピアノを弾けと要求されたのである。

わたしはピアノに向かって座り、ちょっと考えてから、父を喜ばせたいと思って、ベートーベンの『エリーザのために』を弾き始めた。

ところが父はかぶりを振った。

(ああ、お父さんは朝鮮民謡を聞くのが好きだったんだ)

こう思って改めて民謡『陽山道』<sup>ヤンサンド</sup>を弾いた。ところが父は今度もまたかぶりを振り、ソファーに座って目を閉じた。どういうわけか、何か心を静めようとしているふうであった。

わたしはチェロを手にして、目を閉じている父を見つめ、父が辛うじて涙をこらえているのではと思った。確かに興奮しているようだったので、わたしは尋ねた。

「お父さん、何かあったんですか」

「うん、あった」

父は息切れでもしているかのようにこう答えた。目を開いてわたしを見つめていた父は、突然ささやくように言った。

「今日、党からわしに……この父に重要な任務を与えてくださったのだ。このお父さんにだよ。わしを信じて…」

(あっ、そうだったのか) とわたしは思った。それで父はこみ上げる幸福感に、歓喜し頬を紅潮させていたのである。もう老年で顔色の冴えていなかった父が、激情に駆られて興奮の色を漂わせていたのである。

父は喜びに胸を弾ませながらも静かに言った。

「なあ、聖姫、お父さんが好きなその歌、『朝焼け燃ゆる……』という歌、それを弾いてくれ」

ああ、そうだったのだ。お父さんは『代を継いで忠誠を尽くします』のメロディーを待っていたのだった。わたしは弦を調律し、弓に松脂を塗って、ゆっくり息を吸い込んだ。父はソファの背にもたれて目を閉じた。じっと閉じている両眼に涙がにじんでいる。どういうわけかわたしのまぶたも涙に濡れているのを覚えた。わたしは静かに弓を動かし始めた。

朝焼け燃ゆるしののめに  
優しいほほえみ思います

静かな夜空に星が降り  
熱いその愛しのびます

父も泣き、わたしも涙した。朝鮮人民は誰もがこの歌を歌うと、涙を流している。慈愛に満ちたその微笑を思っただけで感動を禁じえないのである。それで父は胸の中で歌を歌い、涙に頬を濡らしていたのだった。わたしも父と同様に深い感動に包まれて涙を流しながらチェロを弾いていた。

演奏は終わった。父は依然として動かずに座っていたが、やがてゆっくり立ち上がり、その大きな厚い手をわたしの肩に載せて言った。

「金日成主席はこのわしに深い信頼を寄せ世に押し立ててくださったが、今日はまた金正日同志がその広い胸に抱いて下さったのだ。この有り難い恩情にどう報いたらよからうか。早く行かないといかん。早く行って任務の遂行に取り組みなくちゃならん。これからはわしの帰りを待つんじゃない」

こうして父は工場へ向かった。

ならば、父はいったいどんな信頼を受けてあれほど興奮していたのだろうか。

当時、少なからぬ関係者は、上質の材料と精密な製作技巧を要する記念碑的建築物の室内装飾用のガラス装飾品の

生産問題を以って、外国の物を買ってきて使うのが最も手っ取り早いと考えた。そんな物を国内で生産している工場はどこにもなく、経験もない今、その製造を自力で行っていたら、とても間に合わず、建築物の竣工は大幅に遅れてしまう、だから外国から輸入するほかないと主張した。

幹部たちからこの報告を受けた金正日総書記は、宋大官さんが働く平壤光学ガラス生産協同組合にこの仕事を任せよう、彼は解放直後から今日まで金日成主席から与えられた任務を果たせなかったためしのない人であると述べた。

信頼とはいえ、これ以上に大きい信頼がどこにあるか。金日成主席が大きな愛を注ぎ、固く信頼して導いて下さった父を、今日はまた金正日総書記が変わることなく手を取って導いて下さることにいたく感激した父は、はや老年期にさしかかり体の衰えを感じている身であったが、勇躍若さを取り戻したのであった。

いつとはなく体調を崩していた父であったが、たちまち元気を回復した。躍動する青春がよみがえり、父は新しい人生の春を迎えたのであった。

当時わたしは生後19回目の春を迎えていたが、父はもはや62回目の春を迎えていたのである。木も年が老いれば中にくつろが出来るというが、62歳の年に再び人生の春を迎えた父であった。金正日総書記の懐は人生の春を呼び戻し

て花を咲かせる太陽の懐であった。それで父は、『代を継いで忠誠を尽くします』の曲を聞きながら涙ぐんだのである。その涙の喜びと涙の幸せ、私に父のその心情をそのままに表現する才能のないことが残念でならない。

父は元気一杯ガラス玉の製造に取り組んだ。

労働者や技術者たちとの協議を繰り返して製造機を設計し、出来た玉をやすりで削るなど昼夜兼行で製造に取り組んだ。こうしてガラス玉10万個を作り上げ建築物を華やかに装飾することに成功したのであった。

そればかりではない。雪が降ろうと雨が降ろうと、年々変わりなく燃え上がっているチュチェ思想塔の烽火にも、父に対する金正日総書記の大いなる信頼がこもっている。そのことを考えながら、わたしは常に誇り高い思いを込めてチュチェ思想塔を見つめている。

そのチュチェ思想塔の烽火用の透明な強化ガラスの製造も総書記は父に任せたのであった。総書記は、透明強化ガラスの製造をあるガラス工場に任せようとしたが、それは難しいとされたとして、輸入するほかないという報告を受けた時、絶対に輸入すべきではないときっぱりと言った。金日成主席の永生不滅のチュチェ思想を万代に末長く輝かせる大記念碑の烽火をどうして外国に依頼して作ろうなどと言うのかと。

総書記は今度もわたしの父を思い、もちろん70歳の年に達しているが、以前と変わりなくわが党の信頼と期待に忠誠と信義を以って報いるであろうと確信した。

よく知られているように、チュチェ思想塔の烽火は高さが5、6階建てのアパートの高さに相当する巨大なガラス製の構造物である。そこに使われる透明強化ガラスの製造課題は父の働く組合の能力では力に余る膨大な量であった。

当時父の平壤光学ガラス生産協同組合とは比べようもなく大きい南浦<sup>ナンポ</sup>ガラス工場もあった。南浦ガラス工場は生産設備にしても大型ガラスの生産能力においても国の最大のガラス工場であった。けれども総書記は父を信頼して、父が働く平壤光学ガラス生産協同組合に透明強化ガラスを製造する課題を与えたのであった。

父はきっぱりと答えた。

「やります。きっとやり遂げます」と。

ところがもし約束した期限内に作れなかったらどうなるか。この困難きわまる課題を父がたやすく受け入れたので、関係幹部たちの誰もが心配せずにいらなかった。いや、それはまず不成功に終わるのではと憂慮したかも知れない。

工場には扉の開け閉てをする暇がないほど関係幹部たちが出入りしたという。彼らの憂いや焦燥にこだわりなく父

の答えは一貫していた。

「親愛なる指導者同志が任せて下さった課題ではありませんか。やりますよ、きっと」

父は労働者たちを励まし、毎日のように夜を徹して働いた。

その頃はスポーツのシーズンであったので、中央級サッカーの試合が盛んに行われていた。ここでわたしがサッカーの話を持ち出したのは、それなりの理由がある。仕事の鬼と言われたほどの父ではあったが、ただ熱狂的な趣味が一つあった。それはサッカーであった。とはいえ父はボールそのものになじんでいたのではない。いや、ボールを蹴ることは全然できなかった。

ある年の祝日のこと。野遊びに出かけた組合員たちが二組に分かれてゴールにボールをシュートする試合をした。それぞれの組の片方はボールを蹴り、他方はキーパーになって蹴られたボールを受け、どちらの組が余計点数を取るかを争う試合であった。

広場に小さなゴールを作り、5mばかり前の位置からボールを蹴ることにした。

最初管理委員長の父がボールを蹴り、組合の党書記がキーパーになって出場した。

人々は恐ろしいほどの「サッカー狂」である父が見事に

ゴールを決めるに違いないと思った。やんやの応援を受けながらボールの前に立つまではよかったが、ボールを蹴った父の格好を見てみんな大笑いした。

カ一杯蹴ったつもりだが靴の爪先がボールならぬ土を蹴り、土ぼこりが舞い上がった。ボールはちょっと転がっただけでたった5メートル先のゴールにさえ届かなかった。キーパーの党書記は土が口に入り、えらい目にあつたと笑って言ったという。

それ以来父は「へぼサッカー管理委員長」と呼びはやされたとのことである。ともあれ、「サーカー狂」の組合委員長の督励で組合の選手たちは試合に出て優勝できずに帰ると、工場に入れてもらえないほどだった。それほどサッカーに目のない父だったので、いつだったかは重要な会議に行くと偽ってあるサッカーの試合を見に行つた。それがばれたのは、テレビの実況中継の際観覧席にいる父の姿が映し出されたからであった。父の熱狂的な応援ぶりにカメラがしばしば父に向けられたのである。

父はサッカーの選手たちのたくましい攻撃精神を、その忍耐力と闘志を好んだ。最後までへたばらずに走り、ボールを蹴る選手たちの姿に、何か自分に似た気質を発見したのであろう。

ところが、透明強化ガラスの製造に取り組んでからはサ

ッカーの試合に見向きもしなくなった。見ようとも思わなかった。あの恐ろしいほどの「サッカー狂」が、サッカーの決勝戦を見ようと誘われても手を振って言ったという。

「それがわしとなんの関係がある。わしも今ボールを蹴って走っているのだ。いよいよゴールを決める日を目の前にしているのだ」

ついに決勝のボールは蹴られた。ゴールである。成功！（9度目の試験生産であった）応力分布の均一な透明強化ガラスが作られたのである。

テニスのボールほどのガラス球（900g）を102cmの高さから落としても割れなかった。クモの糸ほどのひびもつかなかった。

今度は1平方メートルの板ガラスの両端を煉瓦で支え、その上に体重70キロの人が乗っても割れなかった。今一人が並んで2人で立ってもびくともしない。さらに父が乗って初めてひびの入る音がしたので降りたという。このように1平方メートル透明強化ガラスは、150キログラム以上の重さに耐えたのである。

金正日総書記に忠誠の報告を行つた日、父はともに苦労しながら働いた労働者や技術者と並んで写真を撮った。元来父は写真を撮ることを好まなかった。いつもカメラマンを避けて歩いた。

しかし、チュチェ思想塔の烽火の製作にいささかなりとも尽くすことができた組合の努力と、わが生涯の総括がその永遠の炎の中にもっているという自負心を抱いてカメラの前に立ったのである。

「有り難いこの恩情を死んで目に土が入っても忘れることはできないだろう」

これは父が涙ながらに私たち兄弟に語った言葉である。わたしは今もモニュメンタルな建築物に装飾された一つひとつのガラス玉やシャンデリア、ガラスブロックを無心に見ることが出来ない。チュチェ思想塔の烽火を眺める時もこみ上げる誇りを抑えることができない。

輝かしい生を享受しえた父の生涯は、誉れ高い一生であったとわたしは声高く誇りたい。

### 3. 祝福を受けた生、企業家の価値観

ある年、父が海外在住同胞商工人たちと歓談していた際、笑っている父の目がうるんでいるのを見て、その一人がこう尋ねた。

「宋大官先生、先生は本当に幸せなお方です。企業家はいつときとして心を安らかにして暮らしていませんのに、宋先生はどうしてそんなにも心安らかに暮らしておられるのですか」

父は笑って、次のようなたとえを以って話を進めたという。

先人の言葉によると、人間には二つの目と二つの耳、二つの手と二つの足があるが、それにはそれなりの理由がある。目が二つあるのは嘘と実を見分けるためであり、耳が二つあるのは一方の耳は聞き、他方は聞き流せということであり、手が二つあるのは片手は与え、他の手は取れということであり、二本の足があるのは片足で立っているのは危なっかしいから互いに頼りにして立てということである。……

このたとえを聞いて、一同は愉快地に笑った。それは先人の言葉ではなくて宋大官先生が作った話しのようだ、企業家たちを念頭に置いたたとえなんだろうねと問う人もいた。

父は笑って答えた。

どの時代にも企業家は風前の灯のような状態の中で生き

てきたし、今もそのように生きている。風前の灯のようにいつ急に消えるかとおどおどし、いつときも気のやすまらないのが企業家の常である。人に騙されまいとして神経をとがらせ、頼みになる同業者を得んものとあくせくした果てに裏切られては、後ろ指をさされることにもなる。

二つの目と二つの耳、二つの手と二つの足についての父のたとえば企業家を念頭に入れた話であったことは言うまでもなかったろう。

父は話を続けた。

しかし、わたしは人に騙される心配がなかった。というのは、わたしが資本主義ならぬ社会主義祖国で企業活動を行っているからだ。母は決してわが子を騙しはしない。だから母なる祖国がどうしてわたしを騙し、脅迫して金を巻き上げるだろうか。それにわたしには後ろ指をさされるなどという心配はなかった。社会主義祖国に少しでも多くの利益をもたらすことが、わが企業の根本的な目的だからである。また、わたしは、儲けはしても破産を心配することがなかった。風前の灯のようにいつ消えるか知れないとして胸を締め付けられながら神経をとがらせ、不安におびえて生きるようなことは一度もなかった。なぜなら金日成主席と金正日総書記がわたしに信頼を寄せ、温かく導いてくださったからだ。親の手にとられて歩く子は決して転び

はしない。わたしはこの有り難い社会主義祖国で一度として転ぶことなくまっすぐ歩んできた。

父は続けて、名もない一介の私営企業家に過ぎなかった自分を愛国者、ひいては朝鮮労働党員にまで育て、世に押し立ててくださった主席と総書記の恩恵について、その恩恵により、輝かしい生を生きたとして、その道程を詳しく語った。

こうして自分は、億万の富を築いたが、そのすべての金を祖国と人民のために使い、この世のどの企業家も考え及ばない人民の愛を受け、億万金をもってしても手にすることのできない栄光と幸福を享受することになったと、父は話した。

海外在住同胞商工人はみな拍手喝采し、「宋大官先生はこの世でただ一人の『社会主義百万長者』になりました。物質的富と精神的富のすべてを得た社会主義朝鮮の『百万長者』です」と感動して語った。この時から父は、「社会主義百万長者」と呼ばれるようになった。

しかし父に注がれた愛と信頼、幸せと栄光はこれに留まらなかった。70歳を越した父は、体に無理をせず、その技術と経験を生かして組合の仕事を助けるとよかろうということで顧問として組合に残ることになった。

ところが父は単に組合の仕事に口添えするような役職に満足せず、みんなの先頭に立って働いた。仕事を離れた自分を、父は考えもしなかった。当時父は熱い心を抱いて朝

早く工場へ出かけ、夜遅く工場の門を後にした。

父を忘れていなかった金正日総書記は父についての報告を受け、宋大官さんを今一度管理委員長の職に就かせるよう手配すべきだと言った。

復職した日、父は禁酒後数十年ぶりに初めてわが子や孫たちからつがれたお酒を飲んだ。震える手で盃を手にしてわたしたちを見回す父の涙ぐんでいた姿は、今も忘れられない。

当時父は74歳であった。父は涙を隠さなかった。何がゆえに涙を隠そうか。父は涙の滴り落ちた盃を口に当てて、ぐいぐいと飲んだ。

その後のある日、父は深刻な顔をしてわたしたち兄弟に言った。

「老いた馬は道を知るといって、顧みると残念ながらわしはわが責任を立派に果たせなかった。まことに申し訳ない。わしの後を継ぐべき子を育てることができなかったのだから……」

父のその言葉がわたしたち兄弟に与えた衝撃は大きかった。その時わたしは自分が医者であるとして得意になっていたことを省みた。自ら選んだ医者職業が真に自分の進むべき道であったかを自問自答した。

男でない女の自分が父の後を継ぐ義務がどこにあるかと考えていた。それは義務である前に、良心と道理にかかわる問題であった。

父はその時も7人の兄弟の中で誰かがわたしがと言って進み出ることを期待しているようであった。父は恵まれたわが一生を忘れることができず、その返報を自分一人だけでなく、なんとか代を継いで続けていきたいと願っていたのだった。

わたしは父の切情を適えるべく決心して、眼鏡の修理工になった。決心を実行に移すまで数か月かかった。

それまで「医者先生」、「宋先生」と呼ばれていたわたしが、モラン便益サービス生産協同組合に入り、万年筆の修理工や印鑑を彫る男性たちに混じってレンズを加工し合わせるなど、眼鏡の修理工になった。

わたしの友人たちは、正気の沙汰ではないと言って驚いた。わたしが何かの罰を受けた人間であるかのように哀れむような目をしてわたしを見もした。

それは無理もなかった。言うほど易しい転身ではなかったからである。実際わたしは悩みに悩んだ末に決心したのである。

父はわたしの転身を奇特に思っとても喜び、満足した。

わたしの気持ちを理解できず反対した兄弟や友人たちに父は、「聖姫の決心は正しい。そのことでとやかく言うな」と、憤慨して叱ったものである。

3年間眼鏡の修理工として働いたわたしは、独立して眼鏡の修理所を設けることを決心した。この時も父は真っ先に支持してくれた。父はこう言った。

「人がなんと言おうともいったん決心したことは曲げてはならん」

わたしは自分の手で資材を購入し、木工や壁塗りなどの助力を受けて修理所を作り、夜はそこで独り眠り、夜が明けると作業の準備をした。こうして修理所の面目を整え、きれいに上塗りした外壁に「凱旋眼鏡修理所」という看板を掛けた。

こうして3年の間わが修理所は全国の工場、企業、科学研究機関、出版・報道機関の従事者や農民、科学者、教員、記者、道路管理員たちのために数十万個の眼鏡を修理して喜んでもらった。

金正日総書記は私たちの業績を高く評価し、増大する眼鏡の需要を満たすべく、凱旋眼鏡修理所の責任者宋聖姫の要望を適えようとして、平壤眼鏡商店を設立する措置を講じて下さった。こうして風致秀麗な牡丹峰のふもとに2階建ての瀟洒な建物が立ち上げられた。

今はわが国の人たちはもとより、外国人たちにも喜ばれ、海外在住の同胞たちからも物心両面の支援を寄せられているわたしたちの平壤眼鏡商店について話したいことは限りなく多い。とはいえ成し得た成果よりも、待たれている仕事が山積していた。まだ第一歩を踏み出したに過ぎないわたしたちである。

当時父は、金正日総書記の愛と信頼によって、74歳の

高齢に数千名をかかえる大企業の管理委員長に返り咲いて、80歳を越えるまで変わりなく精力的に働いた。

首都平壤をはじめ、全国の至るところに父の業績が光を放っている。

「社会主義は素晴らしい！」と父は口癖のように言っていた。

一般の労働者たちが新市街のマンションに新居を移す時も、ヘルスセンター蒼光院チャングァンの遊泳場で水中眼鏡をかけて水遊びをする子供たちを見る時も、地下鉄のホームに向かって降りていく時も父は独り言を言った。

「社会主義は素晴らしい！」

それは、父自身が生きた有り難い社会主義制度に対する賛辞であるとともに、金日成主席と金正日総書記の限りなく温かい恩情に包まれて輝かすことができたわが生涯がこもっているマンションの窓々に、ガラス玉や眼鏡に対する誇りと自負であったろう。

けれども父の健康は次第に衰え始めた。もはや80の峠を越えた高齢であった。健康ははるかに遠のき、老衰は父にまわりついて遠のかない。

その当時わたしは全国共産主義美風先駆者大会に参加していた。父はベッドに横たわったまま、大会に参加した娘の姿をテレビで見ることになった。

大会が終わると、わたしはまっすぐ父のもとへ駆けつけ

た。父はわたしの手を取って放さなかった。目には涙がにじみ、興奮に声はかすれていた。

「お前はまたこのわしを光り輝かせてくれた。大勢の人たちから立派な娘を育てたと電話をかけてもらった。国旗勲章第1級の受勲者の中でお前の名が一番最初に挙げられていたとしてな。本当にその父にその娘だと言って喜んでくれたよ」

父は、わたしが授かった勲章をなでながら言った。

「これがどんなに大きい表彰なのかを知らなきゃならん。親愛なる指導者同志はお前の功労を称え、今後ともわが責務をより忠実に果たすようにとして表彰して下さったのだ。このことを決して忘れてはいけない」

父は、早く職場へ行って仕事に励むんだ、大会の壇上に立って発言し、決意を述べておきながら、いつまでもこのわしのかたわらに座ってぐずぐずしてはいかん、わしも早く起き上がって職場へ出かけると言った。

けれども父は起き上がることができなかった。年が明けて間もなく、父はとうとう臨終を間近にしていた。大小寒の寒さが猛威を振るっていた時であった。父の顔色から、弱々しく開かれていたまぶたとどんよりした目から、わたしは父の臨終が到来したことを知った。ところが父の口からは「早く出かけて働くのだ、早く」という言葉が吐かれた。

これがほかならぬわたしたちの父であった。臨終を意識した

時、誰であれ、もっとも近い人たち、愛する妻やわが子どもがそばにいることを望むものである。それは当然である。

父も例外であろうはずがない。しかし仕事しか知らない父、偉大な金日成主席と金正日総書記の恩愛に報いるには、わが子どもが自分に代わってそれぞれの務めによりよく励むことを望む父であったがゆえに、いつまでも自分のそばでぐずぐずするのを許さなかったのである。

わたしの結婚式の時も父はそうであった。大勢の人たちが祝杯を上げ、子宝に恵まれて共白髪まで幸せに生きよなどとして騒いでいる時、突然父が「明日から仕事に出かけなくちゃならん」と言って、人々を驚かせたものである。

そのような父であったから、わたしたち兄弟は黙然として立ち上がり、それぞれ職場へ向かった。知らせを受けてわたしたちが駆けつけた時、父はほとんど昏睡状態に陥っていた。父はわが子どもたちに近くに座れと目くばせした。みんな静かに父の枕元に座り直した。

父は弱々しいながらもはっきりした声でわたしたちに言った。

「わしが一生、主席と親愛なる指導者同志の恩愛に恵まれなかったとしたら、国と民族も知らないお金の虫になってしまったことだろう。主席はわしを共産主義社会まで一緒に連れて行くとおっしゃったが、わしの命数が足りなくてそこまでは行けなかったが、主席の意を違えずに今日ま

で歩んできたのだから名残惜しいとは思わない」

父はこうして逝った。かつて金儲けに生涯をかけて奔走した父、一介の私営企業家に過ぎなかった父が、祖国を知り、民族を知り、領袖を知る革命家に、どの企業家も得ることのできなかつた、人民の愛と領袖の寵愛を同時に受け、億万金をもってしても得ることのできない人生の栄光と幸福を享受した「社会主義百万長者」として、後半生を生きた。

しかし、人間が人の世のことわりを悟るに至るのは頭に霜を頂いた時だと言われているように、受けた配慮に報いることができなかつたという痛恨の思いで、父は安らかに目を閉じることができなかつたようである。

とはいえ、父に対する恩愛には果てがなかつた。偉大な太陽の愛が父に注がれるとは、わたしも一家の誰もが想像すらし得なかつた。

わたしの父が世を去つたと知つた金日成主席は、非常に悲しまれて、父の霊前に御自身の名義になる花輪を贈つて下さつた。

金正日総書記は、祖国と革命に尽くした父の功労を末永く伝えるべきだとして、愛国烈士陵园に父の遺体を安置するよう計らつて下さつた。

父は生前、わが墓地を自ら定めていたのだったが、総書記は、祖国と人民のために尽くした父の功労を高く評価して、栄光の頂に押し上げて下さつたのである。

わたしたちはみな泣いた。弔意客たちもそのことを知つてまぶたを濡らした。

霊柩が愛国烈士陵园に向けて出発する時、国家吹奏楽隊が追悼曲を奏した。

霊柩車のあとを、多くの車が列をなして続いた。わたしは厳かな葬送の行列に混じつて行きながら、父が登つていく丘を眺めた。

偉大な慈父の愛の手に導かれてわたしの父が登るその永生の丘、そこに愛国烈士陵园があつた。

わたしたちの父はその永生の丘へ向かっている。偉大な愛がなかつたなら、お金に縛られた人間として忘れ去られたであろう一介の私営企業家であつた父が、今愛国烈士として、あの栄光の頂に上がっている。

わたしは父の柩にすがり、声を上げて泣いた。

「お父さん！お父さんはここがどこなのかご存知なのですか。ここは愛国烈士陵园なのですよ。わたしの言葉を聞いておられますの、お父さん。お父さん、目を開けて頂戴。一度だけでも、たった一度だけでも目を開けてご覧になつて頂戴。お父さん！……」

酷寒の季節ではあつたが、日差しは温かかつた。白雪に覆われている愛国烈士陵园の上に、太陽は明るく温かい光を惜しげもなく投げかけていた。

## むすび

人生行路の最後まで金日成主席と金正日総書記の温かい愛の手に導かれて、一度として足を踏み外すことなく、まっすぐに歩んだ父宋大官の一生は、栄光の頂で終わりを告げた。

けれども愛の歌は果てなく続いた。

1998年9月、はるばる数百里もの前線視察の道から帰っていた金正日総書記が改築なった愛国烈士陵园に立ち寄った。

4時間もの間烈士たちの墓を見て歩いた総書記は、日暮れ時まで戦士たち一人ひとりの姿が刻まれた石写真に目を凝らして、彼らの愛国心に思いを致し、歴史に未長く残るであろう彼らの功績を称えた。

昔の企業家であった父の墓の前に至った総書記は、その石写真を眺めながら、金日成主席によく知られている愛国的商工人であった、宋大官同志は、実に多くのことをしたと高く評価した。

総書記が愛国烈士陵园を参ったとのニュースが新聞やテレビなどで広く伝えられた時、わたしたち7人兄弟は心こもる花束を持って愛国烈士陵园を訪れた。

わたしたちはまず、総書記が見て歩いたコースをゆっ

くりと歩いた。党と国家の責任的な地位で活動した幹部たち、建党・建国・建軍活動で功労を残した人たちや祖国統一の聖業に一身を捧げて世を去った烈士たち、科学者や文学・芸術分野で特出した業績を残した人士など世に広く知られている人たちの前を一人ひとり思い出しながら歩を進めた。

海外在住の同胞たちから「立派なお方たちだけが眠っておられている烈士陵园」と言われているこの永生の丘の上に、一企業家に過ぎなかったわたしたちの父もいるのだという思いに胸を熱くしながらわたしは歩んだ。

やがてわたしたちは父の墓の前に立った。父は謹厳な姿でわたしたちを迎えた。わたしは霊前に花束を置き、父の石写真にじっと見入った。

（お父さん！ お父さんは今何を考えていらっしゃるの？）

わたしは父と心の対話を交わした。

黙ってわたしを見つめている父はこのようにささやいているようであった。

「聖姫、この父親の頼みを間違えず果たしてくれ。きつとな。わしに代わって偉大な金正日将軍に立派にお仕えしてくれ。将軍の大いなる恩寵に、代を継いで忠実に報いるのだ。そして、肝に銘じたまえ。祖国と人民のため

に良心を捧げる人であれば、それが誰であれ、みな偉大な愛の懷に抱かれるし、その懷でのみ人生の幸せを味わえるのだと」

わたしは思う。そして信じる。ここ愛国烈士陵园を訪れる人であれば、それが誰であろうと、生の不変の真理を知りうるだろうということ。

---

## 愛国的企業家の榮譽をにない

---

筆 者：宋聖姫

編 集：尹英日

翻 訳：金時習、李聖洛

発行所：朝鮮民主主義人民共和国  
外国文出版社

発行日：チュチュエ111(2022)年11月

---

E-mail: [flph@star-co.net.kp](mailto:flph@star-co.net.kp)

<http://www.korean-books.com.kp>

